

【エッセイ】

知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む

マレーシアは、世界のさまざまなものを内に取り入れ、新しいアイデアを常に世界に向けて発信している社会です。

植民地化やそれ以前の経験から民族混成社会として形成されたマレーシアは、世界遺産として認められるほどの民族的多彩さを持つとともに、イスラム経済の分野で世界を先導しようとする積極性も備えています。国内では、ブミプトラ政策によって安定と成長をはかる一方で、教育を通じて人材育成の努力を重ねてきました。多数派であるマレー人はイスラム教を日々の暮らしの参照点としていますが、主要3民族のほかに多彩な民族世界があり、また、近隣諸国出身の外国人も成長と多様化をもたらす存在としてマレーシア社会に欠かせない存在です。このように多種多様な人々が集まるマレーシアでは、いろいろなメディアを利用して意見の調整がはかれてきました。

「知識探訪——多民族社会マレーシアの横顔を読む」では、マレーシアの日常生活で見られるものごとを切り口に、多民族社会マレーシアの横顔を紹介します。

■生物と環境——豊かさを支える多様性

何がツバメの巣の価値を決めるのか (佐久間香子)

■歴史と社会——混成社会のかたちと成り立ち

ブルー・マンションの設立者チョン・ファツイー (篠崎香織)

クアラルンプール・チャイナタウンの黄金時代を想起させるクワイ・チャイ・ホン (周蔚延)

■政治と経済——ブミプトラ政策という挑戦

マレーシアは豊かな国なのか (穴沢眞)

第15回総選挙における国民同盟の予想外の躍進 (鷺田任邦)

■イスラムと宗教——日々の暮らしを支える参照点

イベントとしてのクアラルンプール盆踊りと共生への可能性 (多和田裕司)

■文化とメディア——民族混成社会に公共圏を作る

ヨガ指導者スワミ・シヴァナンダとその弟子たち (栗原美紀)

5月13日事件から父親像を模索する映画『Spilt Gravy』 (山本博之)

■教育と研究——国際化と競争で人材育成

「大学ランキング」に翻弄されるマレーシアの中堅大学 (久志本裕子)

マレーシア人青年の異言語間コミュニケーション力の高さ (木村かおり)

■外国人——マレーシアに成長と多様化をもたらすもの

「外来」と「地元」をつなぐニョニャが受け入れる、新たな「外来者」 (柏美紀)

■日本との関係

沖縄から見たマレーシア (坪井祐司)

このコラムは、JAMSの協力による『The Daily NNA マレーシア版』の月刊コラム「知識探訪——多民族社会の横顔を読む」(2022年3月～2023年2月掲載分)を再掲したものです。再掲にあたり表現を一部変更し、写真や図表は割愛しました。執筆者の所属先は原稿発表時のものです(原稿発表日は本文の末尾参照)。過去の記事はJAMSウェブサイトでご覧いただけます。

何がツバメの巣の価値を決めるのか

佐久間香子

ボルネオの森は、金に勝るとも劣らない価値を有する資源を人間に提供し続けてきた。中でも私の心をつかんで離さない資源がツバメの巣 (sarang burung) である。

長寿や子孫繁栄に加えて、女性の健康と美容への効果が期待されるツバメの巣は年々その価格が上がっており、2018年に訪れたサラワク州の州都クチンのとある乾物商店では、贈答用のツバメの巣1箱(6つ入り)が220リンギ(2022年5月現在のレートで約6,400円)で販売されていた。店頭販売価格は首都クアラルンプールではより高くなり、香港に行くとサラワク州では考えられない高値がつけられる。

ツバメの巣市場の拡大に伴ってマレーシアでは、沿岸部の岸壁や森林地帯の洞窟における採集活動に対して、生態系に配慮した採集方法や採集ライセンス制度が各州で整備されるようになってきている。さらに、養殖の手法、適切な評価方法、トレーサビリティ(生産履歴追跡)を含めた流通システムもアップデートされてきた。

では、この高級品を扱う商人たちは、どのように「商品」をランク付けしているのだろうか。森の男たちが命懸けで採集したものは、彼らの期待するように高い値が付くのだろうか。かくして、ずっと森の中で調査してきた私も町に下りて、仲介商人や商店を訪ね回ることにした。

洞窟で採集されるツバメの巣には大きく「白い巣」「黒い巣」がある。それぞれ別の種のアナツバメである。商品としてツバメの巣の価値は何より見た目の美しさで決まるた

め、最高級に位置付けられるのは、少し透き通った美しい「白い巣」だ。

ところが、採集者にとっても、また商人や消費者にとっても商品価値が高くないはずの「黒い巣」が、時として「白い巣」を上回る可能性を持っていることをご存じだろうか。これは、「黒い巣」の市場価格と仲介商人が採集者から買い取る価格には違った価値基準が作用しているからである。

どういうことかという、アナツバメは年に数回(平均3回)営巣するといわれており、何回かに1回は、主成分である唾液以外に血液が混入することがあるという。この血液混じりのツバメの巣を「赤い巣」(red nests)あるいは「血の巣」(blood nests)といい、特別に強力な効力があるとされている。この付加価値によって、商品価値の低いはずの「黒い巣」が、たちどころに「白い巣」を抑えて最高級ランクの商品に大躍進を遂げることになるのだ。

つまり、仲介商人たちにとって「黒い巣」は、採集者から「白い巣」に比べて格段に安く購入することができる上に、運良く「赤い巣」が混入していれば、「白い巣」の何倍もの高値で転売できるものもある。このことから、「黒いままでも商品になり、大当たり(赤)が入っていればもうけもの」という、ハズレ無しの大変ありがたい資源でもあった。

さあ、これを森の人たちが聞いたらどう思うだろう? [2022.5.31]

(さくま・きょうこ 東北学院大学)

ブルー・マンションの設立者チョン・ファツツイー

篠崎香織

世界文化遺産の街ペナン島ジョージタウンのリース通りに、鮮やかな藍色が美しい豪邸ブルー・マンションがある。ホテルやレストラン、カフェ、バーを備え、一部を博物館として公開するペナンの観光名所の1つである。

ブルー・マンションは、チョン・ファツツイー (Cheong Fatt Tze / 張弼士, 1841 ~ 1916年) の邸宅兼オフィスとして1897年に着工し、1904年に完成した。「東洋のロックフェラーと呼ばれた大富豪」と紹介されることの多いチョンは、東南アジアの華人のために中国のビジネス環境整備に奔走した人物でもある。

チョンは広東省梅州市大埔県に生まれた。18歳で今日のインドネシアのジャカルタに移り、1860年代にジャワ島西部やスマトラ島のメダン、アチェなどで財を成した。

1870年代後半にペナンにも拠点を置き、1890年代後半にはペラヤスランゴールに事業を拡大した。マラッカ海峡の両岸で、スズの採掘、プランテーション経営、アヘンの専売、貿易、海運など幅広く事業を展開した。オランダとイギリスの植民地政府も、中国・清朝政府も、チョンに一目置いていた。

チョンは東南アジアで蓄積した富を資本に、1895年頃から中国でも事業を展開した。中国では鉄道敷設など大きな資本が必要な事業を手がけ、東南アジアの華人に中国での事業への参加を呼び掛けた。

しかし、東南アジアの華人は中国投資に非常に消極的だった。中国では1840年代頃から福建省と広東省で帰国者の富を狙う犯罪が増え、1890年代に至ってもその状況が解消されず、東南アジアの華人は中国を危険な場所とみなし、中国の地方官の治安維持や紛争調停の能力に不信を抱いていたためである。

チョンは中国で西太后と光緒帝に謁見する機会を得ると、イギリス領マラヤなどの例

を示しながら、治安維持や紛争調停の制度を改善するよう進言した。また、商業会議所の設立を通じて官民のセーフティーネットを確保しようとした。

中国では1903年に商業の振興をつかさどる省庁・商部が設立され、その傘のもとに中国の主要都市に商業会議所が設立され始めた。中国の商業会議所は商人で構成される民間の組織であったが、商部に直接陳情を行うことができ、清朝政府に働き掛ける重要な経路を提供した。

チョンは広東省で商業会議所の設立にかかわった。またシンガポールを訪れて、商業会議所を設立し帰国時の安全確保に活用しようシンガポールの華人に呼び掛けた。シンガポールの華人はチョンの提案を歓迎し、中国に逃亡した債務者の追及という独自の意義も盛り込み、商業会議所を設立し、清朝商部に登録した。

ペナンでは中国に先駆けて華人の商業会議所が設立されていた。チョンはペナンの華人商業会議所にも清朝の商部への登録を呼び掛けた。同会議所はチョンの提案を受け、シンガポールの例も参照しながら、清朝の商部に登録した。

シンガポールとペナンの華人商業会議所は、今日の中華総商会の前身となった。商業会議所を通じた中国での安全確保は東南アジアの華人から一定の評価を得た。この仕組みは、清朝が倒れ中華民国が成立した後も維持された。

東南アジア・東アジアを股にかけて事業を行ったチョンは、シンガポール、インドネシア、香港、中国にも拠点を設けた。中でもペナンのブルー・マンションは、最も豪華で精巧な造りで、チョンにとって最もお気に入りの拠点であったといわれている。[2022.7.26]

(しのぎき・かおり 北九州市立大学)

クアラルンプール・チャイナタウンの黄金時代を想起させる クワイ・チャイ・ホン

周 蔚延

マレーシアの首都クアラルンプールのチャイナタウンのプタリン通りから西に1つ筋違いのパンゲン小路 (Lorong Pangung、マレー語で「舞台小路」) は、地元の人たちにクワイ・チャイ・ホンと呼ばれてきた。再開発を経て、クアラルンプールで最新の観光名所の1つとして、また最もインスタ映えするスポットの1つとして、2019年以降注目を集めている。

クワイ・チャイ・ホンは「鬼仔巷」の広東語読みで、「おぼけ小路」を意味する。名前の由来には3つ説がある。

1つ目は、この小路で遊ぶわんぱくな子どもたちを「クワイチャイ」(鬼仔) と呼んだという説である。2つ目は、この小路には暴力団や泥酔者、麻薬中毒者、犯罪従事者など「クワイチャイ」と呼ばれる人たちがたむろしていたという説である。3つ目は、この小路が龍虎会という犯罪組織の隠れ家で、その団員が「クワイチャイ」と呼ばれていたという説である。

クワイ・チャイ・ホンには100年余りの歴史を持つ古い建物が並び、その壁はチャイナタウンの黄金時代とされる1960年代をテーマにしたウォールアートに彩られている。中国の伝統楽器である二胡を演奏する老人や、対聯(赤い紙に縁起の良い対句を書いて門やドアの両側に貼る装飾)を書く書家、娼家の窓から客引きする娼婦などが描かれている。

とりわけ目を引くのが、2.5階分の高さを誇る巨大壁画である。ゴム飛びをする子どもたちや、洗濯物を干す女性、床屋など、1960年代の生活をイメージさせる絵が描かれている。

この巨大壁画では、カーラーを髪に巻き、たばこを口にくわえた女性が存在感を放っている。壁画の女性の風貌は、マレーシアでも人気の香港の映画監督チャウ・シンチー(周星馳)が監督・出演した『カンフーハッスル』

(2004年)に出てきた大家と酷似している。そのためマレーシアの華人は壁画のこの女性を大家であると認識する。

クワイ・チャイ・ホンは食でも1960年代を演出する。古い建物が改修され、本格的な地元料理を提供するレストランやカフェ、バーに生まれ変わった。一番の人気店は、何九海南咖啡店(Ho Kow Hainam Kopitiam)である。

同店は、中国海南省出身の何家信が1956年に設立し、茶や半熟卵、トーストなどを提供してきた。当初の店名は「信記」で、何家信の息子で現在の店主である何九が事業を継承した時に現在の店名に改称した。何九海南咖啡店が提供する代表的な料理には、バターとカヤジャム(ココナツミルク、卵、砂糖をベースにした甘いスプレッド)をサンドしたトースト、カレーチキン、海南茶とその他多様な飲み物などがある。これらの料理は海南省にルーツをたどり得るが、マレーシアで独自の発展を遂げたマレーシア料理である。

他方でクワイ・チャイ・ホンの再開発は、歴史的・文化的な正統性に欠けているとの批判もある。例えば、クワイ・チャイ・ホンの建築物には広東省西関の建築様式が見られるが元来の様式や色が損なわれたとの批判がある。

これに対して、再開発を担ったプロジェクトマネージャーのジーン・チャンは、若者にも年配者にも足を運んでもらうことで歴史が記憶され継承されることを願い、歴史の断片の修復に最善を尽くしたと語る。

クワイ・チャイ・ホンは、華人の文化と芸術を体現している。他方で、華人以外の民族も数多くここを訪れており、多民族・多文化のマレーシアの縮図となっている。間もなく世界からも多くの観光客がここを訪れるであろう。[2022.9.27]

(ちゅー・ふいやん 愛知淑徳大学)

マレーシアは豊かな国なのか

穴沢 眞

マレーシアに初めて行った時から、個人的には豊かな国だと思っていた。首都クアラルンプールやその近郊にいたことも影響しているかもしれない。ただ、地方に行った際も貧困を目の当たりにすることはなく、ゆったりと時間が流れることにむしろ金銭でははかれない豊かさを感じた。

豊かさをはかる方法は多様である。一般的には名目の1人当たり国内総生産 (GDP) が共通の指標として使われることが多い。国際通貨基金 (IMF) の数値を見ると2021年のマレーシアの1人当たりGDPは1万1,399米ドル (約158万円) であり、世界ランキングは第69位であった。ちなみに同年の日本の1人当たりGDPは3万9,340米ドルで、世界ランキングは第28位であった。東南アジア諸国連合 (ASEAN) 内では、マレーシアはシンガポール、ブルネイに次いで第3位である。シンガポールは世界ランキングでも第5位と非常に所得水準が高い。マレーシア国内でも、特にクアラルンプールやペナン州ジョージタウンなどの都市部で生活すると、日本との経済的な差を感じることは少ないであろう。

1人当たりGDPは国際比較のために米ドルで換算される。しかし、為替レートはさまざまな要因で決定される。マレーシアの場合、アジア経済危機後に一時的に固定相場制を導入したことはあるが、基本的には変動相場制のため為替レートは変化する。マレーシアリングの対ドルレートが上がれば、ドル換算のマレーシアの1人当たりGDPは上昇する。

リングと円との交換レートも大きく変化した。1980年代前半、プラザ合意後の円高が始まるまでは、1リングはおよそ100円であった。その後、急速な円高により1リングが25円付近で推移していた。現在はやや円が下がってきており、1リングは約30円で

ある。マレーシア自体の物価も上がってきているが、円安もあり日本人観光客などにとっての割安感は減少しているといえる。

生活の実感として、マレーシアの1人当たりGDPが上にあげたように日本の数値に大きく後れを取るとは思えない人も多いであろう。

これに代わり、当該通貨でどれだけの財やサービスを購入できるかを基に算出したものが購買力平価 (PPP) である。

冒頭であげた1人当たりGDPを同じく2021年の購買力平価換算で見るとマレーシアは2万9,686米ドルで世界ランキングは第56位となり、名目値よりも数値もランキングも上がる。マレーシアリングは名目の対ドル為替レートよりも購買力平価換算のほうが米ドルに対して高いということになる。その要因の1つとして、マレーシアは国内製品の輸出に有利になるように為替レートをリング安に誘導することがあげられる。

一方、日本の数値は4万4,739米ドルで世界ランキングは第36位となる。数値は上がるもののランキングは下がっている。その結果、購買力平価のみで1人当たりGDPのマレーシアと日本の差は縮小し、さらにランキングでもその差が小さくなる。

ただし、これまで述べてきた1人当たりGDPはあくまでもGDPを人口で割った平均値であり、所得格差については語ってこない点は注意すべきである。マレーシアはアジアの中でも所得格差が大きい国であり、都市と農村間、また、人種間の所得格差も解消されてはいない。経済的には全体の所得向上と並行して格差の是正が引き続き求められる。[2022.8.30]

(あなざわ・まこと 小樽商科大学)

第15回総選挙における国民同盟の予想外の躍進 (※)

鷺田任邦

先月実施された第15回総選挙は、国民戦線 (BN)、国民同盟 (PN)、希望連盟 (PH) のいずれも過半数に達しないだろうという下馬評通りの結果となった。PHが最大勢力となることは予想されていたものの、大方の予想を裏切ってPNが躍進し、特に宗教保守の全マレーシア・イスラム党 (PAS) は初めて第1党になった。

本稿では、筆者がスランゴール州政府系のシンクタンク、インスティテュート・ダルル・エサン (IDE) とスランゴール大学の協力を得て11月5日の候補者任命日の直前2週間で実施した対面調査 (n=2402) と、独自に同月19日の投票日の直前1週間で実施したオンライン調査 (n=1351) を踏まえ、PNが予想外に躍進した背景について考察したい。

詳細は割愛するが、いずれの調査も、マラヤ半島部を対象とし、前者は選挙区ごとの有権者数・属性構成を踏まえた層化抽出、後者は地域別の有権者数・属性構成を踏まえた割り当てに基づき収集した。

PN躍進の理由については、BNの弱み (例えば統一マレー人国民組織 UMNO の党首をはじめとする汚職疑惑、内部対立による集票マシンの機能不全など) や PN の強み (例えばマレーシア統一プリブミ党 PPBM の資金力・メディア戦略と PAS の組織力) を背景に、マレー人の多くが UMNO に代わる選択肢として PN を支持したためであるなどといわれている。背景についてはさらなる分析が必要であるが、本稿では特に「なぜ予想外だったか」という点に着目したい。

予想外だった理由は、有権者自動登録や選挙権年齢引き下げに伴う有権者数の拡大により票が読みにくいなか、三つどもえの接戦になる選挙区が多かったためだけでなく、各種世論調査において一定数の有権者が投票先を明示しなかったためでもある (筆者らの調査でも、投票参加の意思がないと答えた回答者を除いても約4分の1が該当)。

こうした留保は世論調査に対する不信感

などを反映している側面もあるが、当初は態度を決めかねていた有権者が、BN支持層の一部とともに、投票直前になってPN支持に流れた可能性を示唆する。

実際、各種世論調査を時系列で並べても、BNが失速しPNが台頭する傾向がみてとれるし、筆者が実施した2つの世論調査においても、(調査法が異なるので一概に比較できないが) 候補者任命前調査ではBNがPNをリードしていたが、投票直前調査ではBN支持・未定層が減り、PNがBNを逆転していた (PHは一貫してリード)。

また、IDEとの調査で、前回 (第14回) 総選挙の際に投票先をいつ決めたかという質問に対し、2割程度が投票日当日、1割程度が投票日一週間前と回答していることから、政党支持の流動性や、最後の一押しとなる選挙キャンペーンの重要性が示唆される。

特にこれといった争点がなかった今回の選挙期間中、PNは、チェラマ (政治集会) や SNS を活用しながら「民主行動党 (DAP) 支配のリスク」をあおって PH を忌避させつつ、「腐敗した UMNO」に代わる選択肢として自らをアピールし、マレー人の若い世代にも支持を広げた。

今回の選挙結果は、マレー半島部の民族的・地域的分断を鮮明に示した。我々の調査では、PH支持層の5割強がPASに対して否定的感情を持つ一方、PN支持層もBN支持層も6割強がDAPに対して否定的感情を持っていることが確認された。

こうした分断はあるものの、政党支持の流動性は今後の政党制再編の余地も示唆する。民主的な競争と協調、政党間の離合集散のなかで、いかに分断を乗り越えるか。アンワル・イブラヒム政権、そしてマレーシアの模索が続いている。[2022.12.27]

※ 2023.6.19 出版の *The Round Table*, 112(3) の拙稿も参照のこと。

(わしだ・ひでくに 東洋大学)

イベントとしてのクアラルンプール盆踊りと共生への可能性

多和田裕司

2022年7月16日、シャーアラムで3年ぶりにクアラルンプール(KL)盆踊り大会が開催された。新型コロナウイルス禍による休止を経て待望久しく催されたものである。ユーチューブなどの映像を見ると、日本人、マレーシア人を問わず大勢の人が集まり、盛会であったようだ。主催者発表ではおおよそ5万人の人出があったという。

周知の通り、今回の盆踊り開催に先立って、ムスリムが盆踊りに参加することの是非についてちょっとした論争が巻き起こっていた。イスラームの教義という点で盆踊りは異教の行事であり、ムスリムが参加するのは許されないというムスリムがいる一方で、盆踊りは宗教ではなく日本の文化であり、文化的多様性の容認という観点からも参加して問題ないと考えるムスリムも多い。盆踊りを「宗教」とみるか「文化」と捉えるかという解釈の違いで、トダウンをまとい浴衣を着たマレー人女性が描かれたポスターは、イスラームへの冒瀆とも映るし、多文化共生の具象化ともとれるのだ。

しかし、盆踊りを宗教や文化に囲い込んでしまってよいのであろうか。かみ砕いて述べれば、それを宗教だ、文化だとして考えることが、人々の共生にマイナスに働いているということはないのであろうか。

筆者の知り合いに、コロナ禍以前に毎年盆踊りに出かけていたという若いマレー人夫婦がいる。2人に盆踊りについて聞いてみると、宗教や日本の文化としてではなく、楽しいイベントとして参加しているという。大勢の人が集まり、音楽に合わせてダンスをする。屋台の食べ物を食べながら、日常とは少し違う雰囲気味わう…などなど。

もちろん盆踊りについての知識を尋ねれば、イスラームとは異なる宗教にルーツを持ち、日本の伝統文化として受け継がれ、民族衣装(浴衣)を着る機会といった答えが返ってくる。しかし、盆踊りに参加しているその

瞬間、2人のなかでことさら日本の宗教や日本の文化が意識されることはないらしい。

このような経験は、いまや多くの人の普通の生活のなかに見いだせるものである。例えば日本人にとってのクリスマスもそうだろう。知識としてはキリストの誕生祭であることは知っていても、クリスマスツリーを飾り付けたり友人同士でパーティーに興じたりするさいに、起源としての宗教が意識されることはない。同じく、クリスマスは、ただちに西洋の文化として意識されることがないくらいに「日常化」されてしまっている。

すなわち、クリスマスはもはや宗教でも文化でもなく、「単なるイベント」になっているのである。「単なるイベント」という言い回しから、否定的な意味合いを感じられる方がおられるかもしれない。イベント化という言葉は、世俗化や伝統文化の消失などと共鳴し合いながら、グローバルに広がる現代消費社会を浅薄なものとして断罪するさいの決まり文句ともなっている。

しかし、筆者はこの言葉を積極的な意味で使いたいと思う。宗教にせよ文化にせよ、それをを用いる人々にとっては、自分の宗教や文化こそがしばしば絶対の正義として受け取られる。正義と正義のぶつかり合いに出口は存在しない。お互いの宗教やお互いの文化を尊重してという文化相対主義の掛け声は聞こえてくるが、昨今の世界の動きはこの掛け声がいかにうわべだけのものに過ぎないかを物語っている。

それぞれがまったく異なる背景を持つ個々人が共通のイベントで交流し共生すること。人々の共生を常に模索してきたマレーシアであるからこそ、KL盆踊りの向こうに、宗教と宗教や、文化と文化の共生ではない、真の意味での「人と人の共生」につながる機会が増えていくことを願いたい。[2022.10.25]

(たわだ・ひろし 大阪公立大学)

ヨガ指導者スワミ・シヴァナンダとその弟子たち

栗原美紀

スワミ・シヴァナンダは、宗教や国を問わず愛の普遍性、一体性を説き、20世紀におけるヨガの普及に大きな影響を与えた指導者の1人である。シヴァナンダがヨガの教えを形成する背景には、彼のマレー半島での経験があった。

後にスワミ・シヴァナンダとなるクーパー・スワミーは、1887年に南インドのタミルナド州で生まれ、西洋医学を学び、医師となった。1913年にはインドを旅立ち、英領マラヤに向かう。マラヤでは約10年、プランテーション農園の病院で働きながら慈善活動も行ったとされる。

しかし、時がたつにつれ、医療による奉仕に限界を感じるようになり、インドへ帰国。出家し、スワミ・シヴァナンダの名前を授けられ、修行に励んだ。

シヴァナンダは、修行中も診療を行っていたが、人々を癒やし健康と幸福に導く方法としてヨガも教授するようになる。1936年には北インドのリシケシュにディバイン・ライフ・ソサエティー (Divine Life Society、以下DLS) という精神的知識の提供と無私な奉仕を目的とした団体を設立。シヴァナンダの弟子たちも世界各地に渡り、彼の教えの普及に努めた。

マレーシアにも、1953年にDLSの支部がつくられた。現在のDLSマレーシアの活動には、日常的なヨガ教室や子ども向けのヨガキャンプの運営といったヨガの指導だけでなく、医療サービスの提供、孤児院の運営などもある。

パラムさんは1988年から、首都クアラルンプールのリトル・インディアで開かれているDLSのヨガ教室に参加している (新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2022

年3月現在教室は一時中断)。もともとは生徒として通い始めたのだが、運営側から声をかけられ、ボランティアの指導者となった。

指導を引き受けたことについて、パラムさんは「ヨガを始めて6カ月のうちに自分の体の状態の改善を経験したんだ。僕はヨガの恩恵を受けたから、それを社会に還元しようと決めたんだよ。ヒンドゥイズム(ヒンドゥー教の精神・文化)にはセヴァという言葉がある。何かを受け取ったら、それを通じて他者を助けましょう、奉仕しなさい、という意味だね。われわれはスワミ・シヴァナンダの弟子だから、形を変えずに彼の教えを伝えるんだ」と語る。

「奉仕しなさい、愛しなさい、与えなさい、浄化しなさい、瞑想(めいそう)しなさい、悟りなさい (Serve, Love, Give, Purify, Meditate, Realize)」はシヴァナンダの教えの中核である。

シヴァナンダの教えを実践しているのはパラムさんだけではない。パラムさんの教室に通う生徒たちは、エクササイズ中、積極的にお互いアドバイスをし合う。長年教室に通う参加者がヨガを始めたばかりの参加者に体の使い方のかつを教えたり、年長者の参加者が若い参加者を応援したりと、それぞれが自らできることを持ち寄って、一方向ではない知識・技法の伝授が行われている。

もちろんパラムさんの指導では、身体運動だけでなく、健康や幸せを築くための考え方のヒントも提示される。シヴァナンダのマレー半島での経験に基づく教えは今もなお、その弟子たちによって受け継がれているといえるだろう。[2022.3.29]

(くりはら・みき 上智大学)

5月13日事件から父親像を模索する映画『Spilt Gravy』

山本博之

2022年6月、マレーシア映画の『Spilt Gravy: Ke Mana Tumpahnya Kuah』がマレーシア全国の劇場で公開された。舞台俳優で劇作家でもあるジット・ムラドの2002年の演劇を映画化したもので、ジットも天使役で出演している。

天使役と言えば、ジットはヤスミン・アフマド監督の『タレントタイム』でも天使役を演じている。マレーシアでは天使が人間の姿で登場する映画は検閲に通らないため、『タレントタイム』では天使と言わずに観客に解釈を委ねた。しかし、天使とはっきり呼んだ『Spilt Gravy』は上映許可が下りず、『タレントタイム』とほぼ同じ頃に制作されたにもかかわらず、制作陣の検閲局に対する粘り強い交渉の末に、完成から11年の時を経ての新作公開となった。ジットが62歳で他界した4カ月後だった。

タイトルの『Spilt Gravy』は「(ご飯に)かけられた肉汁」で、「この親にしてこの子あり」を意味するマレー語のことわざ「肉汁はご飯にかけるもの」に由来する。

マレーシア映画には珍しく「父親とは何か」がテーマで、引退した著名なジャーナリストである父親が天使から余命1日と知らされ、疎遠になっていた5人の子どもたちを夕食に招く1日の物語である。

長男はアウトローの世界で生きる元軍人、長女は舌禍が絶えない劇作家、次男は不満ばかり言っている英語教師、三男は仕事もプライベートも完璧なゲイの建築家、次女は自分はトロフィーワイフだと割り切っている一児の母。それぞれ母親が違う5人の子たちは、古い世代に属して保守的な考えを持つ父親に反発するかのようにならざるを得ない異なる生き方を選びながらも、父親のことをずっと気にかけている。

『Spilt Gravy』が検閲に通らなかったのは天使のためだけではない。辛辣なブラックコメディで知られるジットが憑依したかのように、登場人物たちがマレーシアの政治的・

宗教的なタブーに触れる際どいセリフを連発しているためだ。

1969年の5月13日事件も正面から扱っている。マレー人と華人の対立で100人以上の死者が出た事件で、50年経った今でも、国家転覆を企てた共産主義者が扇動したという政府の公式見解以外を公の場で語ることはタブーとなっている。本作品では、明らかに殺人に関わった一般市民のマレー人がその後すぐに日常生活に戻り、周りの人たちも彼を以前通り受け入れていたことを回想する場面がある。ホラー映画の形をとることなく一般のマレー人に潜む狂気を描くという異色の作品である。

劇場公開を勝ち取るため、劇中の「天使」という言葉に別の意味を重ねるなど、本作品にはこまごまとした工夫が重ねられている。結末も、一見すると夢オチにも見える終わり方になっている。実はエンドロールの最後で夢オチでないことが示されるが、マレーシアの映画館ではエンドロールの終わりまで観る人はほとんどいないために気づかれない。かつてマレーシア映画でご法度だったホラー映画は、夢オチにすることで公開が認められ、それを契機に事実上の解禁になった。本作品もマレーシア映画の検閲の1つの画期になるだろうか。

子どもたちから見れば女性関係にだらしなくてひどい父親だが、父親なりの子への思いも明らかになっていき、良くも悪くも「この親にしてこの子あり」という物語になっている。かつて子どもだった人たちにも、そして自分の子や他人の子の成長に何らかの形でかかわっている人たちにも、ぜひ観てみることをお勧めしたい。[2022.6.28]

(追記 Netflixでは『Spilt Gravy on Rice』の題で配信され、夢オチとは別の結末がつけられている。)

(やまもと・ひろゆき 京都大学)

「大学ランキング」に翻弄されるマレーシアの中堅大学

久志本裕子

「大学ランキング」を日本のメディアでも目にすることが増えているが、マレーシアでは教育省の大本令でランキング向上が目指されてきた。以下では、筆者が2014年から2019年までマレーシア国際イスラム大学（IIUM）に勤務し、いわば参与観察をする中で見た大学ランキングの影響を、フィールド報告として共有したい。

マレーシア教育省は2015年に『マレーシア教育ブループリント（高等教育）』を発表し、2025年までの教育の目標を明確にした。この中で「大学の質」の向上に関しては、2025年までに英国の大学評価機関クアクアレリ・シモンズ（QS）が発表する大学ランキングで、アジア25位以内に1大学、世界100位以内に2大学、200位以内に4大学をランクインさせる、という数字が明示されている。これが「大学の質」を測る基準としてふさわしいかの議論はない。マレーシア政府はこの目標を達成すべく政策を進め、2022年現在、マラヤ大学は世界65位（2015年は151位）、アジア8位という、目標以上の成果を上げた。

筆者が勤務していたIIUMは同じ公立大学とはいえ、「リサーチ大学」として重点化されたマラヤ大学などに比べて「格下」の位置付けであり、QS世界ランキングの順位は2015年の550位から2022年には650位と下がっている。国を挙げたランキング向上の取り組みがこのような中堅大学にもたらしたものは、余計な書類書きと、手っ取り早く数字で成果を出すことを優先し、そうでない仕事は極力しない精神ではないかと思う。

大学のランキング向上を目指す政府が各大学に求めたものは「数字を出すこと」であった。学期ごとに行われる教員評価では、国に定められた大学ごとの目標から割り出された、個々の教員の数値目標の達成度を点数化して記入する。文系の助教であった私のノルマは、一定の質が認められる学術誌の国際的リストScopus（ほぼ英語ばかり）に掲載さ

れている雑誌に1本、それ以外の論文を少なくとも2本、毎学期執筆することであった。日本の地域研究では学術論文は通常1人で執筆するので全く無理な目標だが、著者が10人の共著論文でも同じ「1本」なので、大人数での共著が大学から勧められる。研究倫理的にグレーなケースもめじろ押しである。

研究資金にもノルマがあり、1学期当たり最低5,000リンギ（約15万円）の研究予算を自分で取ってこなければ研究予算はほぼゼロであった。とにかく外部予算に応募することを求められるが、マレーシア政府の研究予算は非常に競争率が高いので、日本のトヨタ財団などの申請時には日本に何の関心もなかった研究者もこぞって計画を提出する。

これらのノルマは他の会社などでも使われる「重要業績評価指標（KPI）」という名で呼ばれるが、とにかく皆が真剣にも冗談にもこの語を日々口にした。

IIUMは理念として「知識のイスラム化」を掲げており、西洋中心的な知識の生産と流通、つまりは大学ランキングの上位を欧米の大学が占め、欧米の学術雑誌だけが高く評価されるような世界システムを批判する立場にあったはずなのだが、現状ではまさにそのシステムの沼にはまっているようにみえる。

ただ、そうした中で大学を支えているのは、システムがどうなろうと熱意を持って工夫を凝らした授業を行い、日本の感覚では驚くほど学生に親しまれている、個々の優れた教員たちである。ここに記した状況を粘り強く批判し続ける研究者も少なからずいる。

教育や研究の手法を共有する研修も多く、IIUMの先生たちから学んだことは私の一生の宝である。今回の記事で「大学ランキング」に過度に振り回されることの怖さが少しでも伝われば、そうした先生たちへのわずかな恩返しになるかもしれない。[2022.4.26]

（くしもと・ひろこ 上智大学）

マレーシア人青年の異言語間コミュニケーション力の高さ

木村かおり

マレーシア政府は、勤労観や科学技術の習得を目的に現在まで約1万6,000人を日本に派遣してきた。いわゆる東方政策 (LEP) である。

マラヤ大学人文社会科学部東アジア研究学科日本研究プログラムでは2022年6～8月に、日本・韓国・マレーシアをオンラインでつなぎ、「多言語・多文化環境で働く人のためのケース学習ワークショップ」をLEP40周年記念事業の1つとして実施した。

参加者は、日本人学生と日本留学中の学部生、韓国で日本語を学ぶ学部生、マラヤ大学の日本研究プログラムの学部生とマレーシアの語学学校で日本語を学ぶ新社会人であった。日本人が海外の職場でコミュニケーションのトラブルに陥った事例や、外国人が日本のビジネスの場でコミュニケーションの問題を感じた事例などを取り上げ、対処方法を日本語でディスカッションした。

日本人の就労世代の減少もあり、アジアでは日本語人材の需要が高まっている。市場が日本語人材に求めるのは、日本語力に加え、コミュニケーション力であろう。コミュニケーションと言っても様々な形態があるが、私は、マレーシア人の異言語間コミュニケーション力の高さに、本ワークショップをはじめ国際協働交流学习で、いつも驚かされる。

本ワークショップに参加したマレーシア人の日本語力は、韓国人やその他の留学生参加者よりも劣っていた。しかし逆にそのことがマレーシア人参加者の意欲とコミュニケーション力を引き立たせた。

一般に日本語学習者は、日本人との交流会に魅力を感じつつも、日本語ディスカッションがあるワークショップには参加を尻込みすることが多い。これに対してマレーシア人参加者は、本ワークショップへの参加を尻込みしなかった。

ワークショップのトピックは「働く」ことであり、参加者は日本語でのディスカッションの前に「働く」ことや「ケース」の状

況を日本語で話し合い、理解する必要があった。マレーシア人参加者は口頭でついでいけない時に、オンラインで相互に書き込みが可能なホワイトボード Jamboard を画面共有したり、Zoom のチャット機能を利用したりして、英語も差し挟みながら、うまく参加していた。

実はこの半年ほど前にも、マラヤ大学 (UM) と日本の大学生との Zoom 交流会で、マレーシア人学生のコミュニケーション力の高さを感じていた。この交流会では、参加大学のクラス規模の関係で、UM の1年生1人に対し日本人学生5～6人が1グループで交流した。日本人学生は交流会が始まってもなかなかカメラをオンにせず、顔を見せなかった。UM の学生に促され会話を始めたものの、主に級友を相手に日本語の会話を進めた。

これに対し UM の学生は、グーグル翻訳や Zoom のチャット機能を駆使し、孤軍奮闘で片言の日本語で会話に参加した。また SNS を使い UM の級友に応援を頼んだり、英語を並べたてたりという戦略も併用していた。

私はその姿を頼もしく感じるとともに、UM の参加学生がそもそも、日本人学生5～6人を相手に1人で交流するという計画に誰1人として異議を唱えず、ただ興奮して交流会を待ち望んでいたことを思い返し、異言語間のコミュニケーションに臆することのない UM の学生に改めて驚きを感じた。

この交流会に参加した UM の学生は、入学時に異文化間能力を測る BEVI テストを受けていた。そのスコアは、「社会文化的オープン性」、「外的世界への関心関与の高さ」において、日本の大学1年生の平均スコアをはるかに上回っていた。なるほど、UM の学生たちのあのスコアの高さはこのようなコミュニケーション力や他者への関わり方を示唆していたのかと、マレーシアの教育現場でしばしば実感している。[2022.11.29]

(きむら・かおり マラヤ大学)

「外来」と「地元」をつなぐニョニヤが受け入れる、新たな「外来者」

柏 美紀

2022年夏、初の本格的な調査に苦戦する私は息抜きに、マレーシアのとあるニョニヤ料理店を訪ねた。ニョニヤとは、15世紀ごろから植民地期にかけて到来した華人系移民と、地元女性との結婚で誕生したとされる華人系プラナカンのうち女性を指す。彼女たちは、さまざまな文化を融合させながら独自の料理を形成してきた。私は新型コロナウイルス禍でマレーシアへの渡航のめどが一向に立たない間、ガイドブックでこの店の料理の写真を何度眺めてきただろう。

この経緯を知った店のオーナーが、思いがけず厨房に通してくれた。彼女は、「あなたはお客さんなんだから、写真でも撮っていて」と言い残し、店先へと戻って行った。勝手口の外にはマラッカ川が流れ、遊覧船が往来しては、はしゃぐ観光客の声が聞こえてくる。

厨房に目を戻すと、私と同世代の男性と、慣れない手つきの女性が黙々と調理している。私は彼らを邪魔しまいと、ひとまず皿洗いをしながら様子をうかがうことにした。

しばらくして、巨大な鍋に白い粉を振り入れる男性に、「これは何？」とようやく話しかけることができた。「塩」。問いかけを続けるうちに、次第に男性の方から「これはニンニク」などと教えてくれるようになった。

その後も必死に手伝いを続けた私。朝食を食べてすぐ帰るつもりが、気づけば午後3時を回っていた。「賄い食べない？ 良い魚が手に入ったんだ」と声をかけてもらい、皆で食卓を囲み、話題は身の上話へ。

ニョニヤであるオーナーは離婚後、女手一つで娘を育てるため、母から習ったニョニヤ料理を屋台で振る舞い始めた。それが評判となり、中心地に店を構えて10年以上。国の優遇政策の対象外となる非マレー系の1人娘は、活躍の場を求めて外国に移住した。

その娘と入れ替わりで受け入れたのが、当

時10代のミャンマー出身の男性であった。彼は10年以上住み込みで働いており、息抜きにはたばこと故郷の音楽が欠かせない。

一方の女性は、1カ月前にミャンマーから来たばかりの彼の姉。地元の言葉が分からない彼女は、口に合わない食事を切り上げ厨房に戻った。

そつとのぞくと、彼女は黒くて丸い物体を手にしていて。私もつられてその物体に手を伸ばすと、外側が意外にもろく、「ビシャッ」と液体が飛び出し、私の顔面を直撃した。物体の正体はニョニヤ粽ちまきに入れる塩漬け卵だった。粽には卵黄のみを入れる。残った白身は強烈な臭いを放つ。顔面に浴びた臭いに驚き困惑する私を見て、女性はようやく笑顔になり、豊かな表情と身ぶり手ぶりで多くのことを教えてくれるようになった。

店は、「おいしいね～。次はどこに行こうか」などと談笑する家族連れでにぎわう。故郷を離れた男性が、彼らを見つめる表情から私は目が離せなかった。「最近値上がりした上に料理の量も減ったって、この店の評判が悪くなってるのよ」とオーナー。「いや、客は金持ちなんだし…」とオーナーが盛った料理の量を減らす男性。オーナーは彼の意見を尊重し、「うちのシェフは彼だから」と全てを任せている。

多民族国家マレーシアにおいても、日本と同様に外国人労働者は欠かせない存在となってきた。彼らは安価な労働力として期待されるものの、彼らに対して、「仕事を奪われてしまう、治安の悪化が心配」といった懸念を抱く地元住民も少なくない。さまざまな事情・感情を抱えながら社会を支えてくれる彼らを、尊重しつつ受け入れるにはどのようにすればよいのだろうか。[2023.2.28]

(かしわ・みき 京都大学大学院)

沖縄から見たマレーシア

坪井祐司

筆者の勤務先がある沖縄には、亜熱帯の気候や「やんばる」の森などの自然環境から、人間が紡ぎ出す文化（タイ米で造られる泡盛やバナナの祖先種を利用した芭蕉布など）まで、さまざまな面に「東南アジアらしさ」を見つけることができる。

沖縄の文化は、「チャンプルー文化」とも形容される。古くは中国など東アジアと、現代ではアメリカと混交した沖縄の文化的多様性を指す語である。チャンプルーは沖縄料理の代表格であるが、マレー語の「campur（混ぜる）」と同じルーツを持つと思われる。海を通じてさまざまな地域の人や文化が融合した社会は、マレーシアに通じるものがある。

筆者の専門である歴史学からみても、沖縄とマレーシアに関しては密接なつながりがあった。東南アジア各地に船団を派遣し、交易で名をはせた琉球王国の存在である。東南アジア史には、港市国家という概念がある。王が交易の場である港に位置し、商業を統制することで権力を振るう国家である。東南アジア島嶼部の国家は、内陸よりも海に向かって開かれていた。琉球もまた、この港市国家の定義に当てはまる存在であった。

現在のマレーシア半島部における代表的な港市国家がムラカ（マラッカ）王国である。琉球とムラカは、15世紀のほぼ同時期に最盛期を迎え、東アジアと東南アジアを結ぶ海上交易の拠点として繁栄した。交易に重要な役割を果たしたのは華人であり、那覇にはムラカと同様にチャイナタウンがあった。

両国には外交・交易関係があった。琉球王国の記録「歴代宝案」には、ムラカとの間の文書のやりとりが残されている。そこから、琉球が中国の陶磁器や日本の刀剣を輸出し、ムラカからインドの織物を輸入していたことが分かる。琉球の王都である首里の遺構からは、マレー式の短剣（クリス）も出土した。

琉球とムラカの関係は、説話の中にも埋め込まれている。マレーシアには、「ハン・トゥ

ア物語」という英雄伝説がある。ハン・トゥアはムラカ王国に仕えた武人であり、ムラカの王統記「スジャラ・ムラユ」にもその名が登場する。ハン・トゥアは、武勇だけではなく王への忠義を体現した人物として、後世の文学や映像作品でもたびたび描かれてきた。

ハン・トゥアはムラカ宮廷でラクサマナという称号を得たとされており、それが史実ならば、彼は琉球との外交に関与した可能性もある。また、ハン・トゥアの冒険譚において、彼の幼なじみの武人が登場するが、その1人にハン・レキウという名の人物がいる。このレキウは、琉球に由来するとも言われる。

「スジャラ・ムラユ」や「ハン・トゥア物語」は、史実と伝説が混合した歴史叙事詩であり、ムラカ王国の滅亡後に成立したものであるから、ハン・トゥアやハン・レキウが実在したという確たる根拠はない。しかし、ハン・トゥアを巡る物語は、ムラカと琉球との深い関係を示唆している。

「スジャラ・ムラユ」には、中国からハン・リーポーという王女がムラカに嫁いできたという説話もある。これらの人物に共通する「ハン（Hang）」という名前は、中国系の可能性を連想させる。琉球とムラカは、華人がつなぐ東アジアの海域世界の一部であった。

琉球もムラカも昔日の繁栄は失われたが、海をまたぐ人のつながりを通じた重層的な文化は現在にまで受け継がれている。沖縄では、世界中に広がるウチナンチュ（沖縄人）のネットワークが健在である。

マレーシアでは、多くの移民を受け入れて多民族社会が築かれた。現在の多様性を持った文化や社会のあり方は、歴史を通じた交流の所産である。沖縄における「東南アジアらしさ」に触れると、日本とマレーシアが海を通じてつながっていることを実感できる。[2023.1.31]

(つばい・ゆうじ 名桜大学)